

小田実全集（小説 第16巻）

HIROSHIMA



講談社  
小田実全集

*Makoto Oda*



目次

HIROSHIMA

I  
II  
III  
著者から読者へ

5 7 273 285 358



# HIROSHIMA

— τὸ ἔπος —

武器をつくる目的は人を殺すことにあるのではない。ひとえにそれは誰かが他の手だてを見つけて問題を解決するための時間を稼ぎ出すことにある。

ロス・アラモス科学実験所所長（1945-1970）

ノリス・E・ブラッドベリー博士

I

原野は馳けるのに適している。実際、ジョウはいつでもそこで馳けていた。その姿を何人か町の人間で見たのがいたのだろう。いつのまにか彼は「馳ける男」というぐあいに呼ばれ出していた。

仕事のついでに原野を突き切つて走る道路を旧式のばかりでかいフォード製のトラックで通ることがある。そんなときには、いつでも、未舗装の石ころ道がゆるい傾斜を上つて小高い丘に達したあたりで（そこを彼は原野の中心だと勝手に決め込んでいた）トラックを止めると、はるか彼方に頂上に向つたらと雪をいただいて光る薄ムラサキの山脈にむきあうようにしてゆつくりと小便をしてから、いつものぶあつい皮でできた作業靴を軽いズツクの運動靴にはき替えると、斜めに一気に丘を馳け降りて原野に入つてそのまま大地を跳びはねるようにして馳けた。

「ホワイト・サンド白色砂地」という名前を原野はもっていたが、そのあたりは名前とはうらはらに薄汚れた褐色の荒れ果てた大地がどこまでもひろがって行くばかりだった。ところどころ乾ききつたミドリ色をした短い草がまばらに生えている。そうかと思うと、まったく草も木もなくコンクリートのように硬いかたい大地の表層がむき出しに出ていた。「サンド砂地」と言うには、あまりに土は硬すぎる。力自慢の彼でも一度試しにシヨベルを「ランチ牧場」からもつて来てコンクリートの大地に突き立ててみたが、シヨベルはほんの表面に突き刺さっただけで、手を放すと呆気なく倒れた。

そのコンクリートの表層には石ころがどこへ行つても散らばっていた。まるで、誰かが力まかせにその硬質の平面にまき散らしたみたいだった。誰がまき散らしたのか。馳けていて、ジョウは神を感

じるときがあった。町の教会へはときどきの日曜日の朝、住み込みの牧場ランチからフォード製のトラックで出かけて、ボスのジョンから「おまえ、信心深いな」と感心したふうに、また、皮肉を言うように言われていたが、おめあては教会に来る女の子たちだった。着かざってやって来たのに声をかけたり、教会のあとのデイトに誘ったりする。それにそんな小さな、せせつこましい教会の会堂のなかに神はいるはずはなかった。まだけつこう若いのに喘息病みのようにしわがれた声の牧師のお説教のなかにもいるはずがない。神は原野の寸法にふさわしくもつと廣大でもあれば、着かざった女の子たちとも何んのかかわりあいもない、コンクリートのように硬い大地と同じようにもつと硬質な何ものかだった。原野のはしつこのところにそこにへばりついたように住むインディアンたちもそんなことを考えているのかも知れなかったが、彼にとつて原野が神だった。

あれは、去年の夏、激しい吹き降りがすさまじい雷鳴とともに襲いかかってきたときだ。原野にはそのあたりどこにも逃げかくれする場所はない。大地にそのままうつ伏せに身を伏せているよりほかになかったが、頬にビシビシと叩きつけて来たのは雨が雹に代つていたからだ。そのうち、大気に電気がこもつて来たのか、耳が異様に鳴り出し、頭髮が逆毛立っているのが顔を伏せたままで判った。もうおしまいだと思つた。そのときのことだ、だらしなく大地に投げ出したままになつていた左手があたかも自分で意志をもつもののようにしてすばやく動くと、腰のバンドを途方もない力で引き抜いて力いっぱい投げた。きき腕の右手でも投げ得ないほどの距離をバンドは飛んで行ったが、バンドが大地に音をたてて落ちると同時に閃光がそこを叩きつけた。身に着けた金かな気けのものには彼はすべて捨てたつもりになつていたのが、バンドの驚をかたどつたバックルだけは忘れていたのである。閃光の

狙いは正確にバックルにさだまってそこに狂いはなかった。あとで拾い上げてみると、鷲のクチバシのところが折れているだけでバンドには焼け焦げた跡はなかった。

しかし、そんなときだけが彼が原野で神を感じたときではない。鳥の声ひとつしな静かな原野を馳けて行くときには、ふと硬い大地が口を開いて何ごとかを語りかけて来る感じになった。そんなとき彼は立ち止まって、まわりの物音に懸命に耳を澄ませてみるのだが、もちろん、そんなふうにしてみたところで、原野には太古から堆積して来た静寂のぶあつい厚みがどこまでもひろがって行くばかりだ。そんなとき、雁が群れをつくって、立ちつくす彼の頭上を飛び抜けて行ったりする。かなりな高度を飛んで行くのだろう、羽ばたき激しく飛翔しているさまは彼の眼にもよく見えているのだが、音は地上にまるつきり聞こえて来ない。まるで無声映画の場面が進んで行くようにして雁の一群は動き、澄明な原野の空間にしばらく見えていたが、突然、かき消すように消える。裸眼視力一・五を誇る彼の視力もそのあたりで限界が来たのちがいがいなかったが、あたかも雁がそこで力つきて落ちたように見えた。たしかに原野は雁が飛び抜けて行くにはあまりに広大すぎるのだ。

そんなとき雷鳴に会ったとき以上にあざやかに原野が神だという気持に彼はなつた。名状しがたい広大なものが原野のひろがりそのままの延長のようにして、からだのうちに押し入って来て、彼は息苦しくなり、大地にぶつ倒れそうになった。そんなとき、ぶつ倒れてしまえば、人間は神を見たりするのだろう。あるいは、そのまま生き神様になつたりする。生き神様になる代りに彼は馳け出している。ピョンピョンと硬質のコンクリートの大地の上を飛び跳ねて行くようにして彼は馳けた。ふしぎにからだが軽くなつていて、大地の上に投げ出されてどこまでも硬質の表層の上を散らばって行く石

ころのようにして彼は馳けた。誰が石ころを散らばせて行くのか。

もちろん、彼は馳けてばかりいたわけではない。仕事はよくやつた。牧場のランチャーの仕事を切離すわけにはいかないにちがいない。馬も老練のボスのジョンほどではないが、かなりうまく乗りこなした。ロデオの芸当もけっこうやつてのける。ときには熟達の中年の牧場者たちが舌をまくほどの荒芸あらげいもやつてみせた。しかし、牧場での彼の足は、やはり、何んと言つてもその旧式の大型フォード・トラックだろう。十年以上もまえにジョンが買ったもので、もういいかげんガタが来ている。エンジンがうまくかからないことが間々あつて、そんなときには彼は運転台の計器盤のあたりをこぶしで殴りつけながら「こん畜生、この老いぼれめ、言うこときかなきあ、売りに出すぞ」と大声でわめきたてた。すると、ふしぎにエンジンがかかつて、車は動き出した。

頑丈な車で、牧場はおろか原野にも走らせてみたことがあつた。コンクリートのように硬い大地の上を石ころを蹴散らせながら走るのだが、そういうときには彼は自分で馳けている気になっていた。

「何ていう顔をしているんだ」とジョンに、そんなふうにしてトラックを走らせているのを見つかったときに言われたことがあつたが、馳けているときにも彼はそんな顔をしているのだろう。泣き笑いをしているような顔であつた。一度、気になって鏡を見たことがある。もちろん、走りながらだが、彼はほんとうに泣いているようにも笑っているようにもそんなふうにも苦しげにも愉快げにも見えた。

トラックの運転席の床にはいつもピストルの弾が何発かころがつている。ハンドルのつい横手に特別の枠をつくつて大きなショット・ガンがかけかたであるのだ。警官が街のギャングと派手にわたり合う、ショット・ガンはそのときの武器だが、そこらあたり警官はいなかつたから、牧場者ランチャーは自分で自

分の身を護る必要があった。彼はまだ貫つていなかったが、ジョンは警官の「免許」<sup>ライセンス</sup>をもつていて、牧場<sup>ランチ</sup>に押し込み強盗に來たのは逮捕できるし、そのショット・ガンでひと思いに射殺することもできた。ジョンはやさしい心をもつた男だが、同時にそういうときには容赦しないだろうことは彼にはもうここ二年ほどのジョンとのくらしでよく判つていた。ジョンは仕事のとちりには厳しかった。もうこのごろはあまりやらなくなつたが、牧場に來たてのころは、ときにはゲンコが降つて來たこともあつた。しかし、そのあとすぐジョンは黙つてタバコを彼にさし出した。

六十歳をいくつか越した年になつていた。しかし、肩幅はあくまで広く、からだもがっしりしていて、おとろえは見せない。妻子はなかつた。いやこれは、すくなくとも、今、牧場にはいないと言つたほうが正確だろう。「あなたには子供が三人いるんだつてな」と、町の酒場「黄金の鷲」<sup>ゴールドエンイーグル</sup>（の入口の上には木でつくつたはげつちよろの金色鷲が羽ばたいていた。彼が九死に一生を得たバックルは、バーの親父のジャックが特別にあつらえて持つていたのを三拜九拝して貰つて來たものだ）で、小耳にはさんで來た噂をジョンにすると、ジョンは彼をあれほどの冷たい眼で人に見られたことがないとつきに彼に思わせた眼で見て、「てめえのことに精出しなよ」とそれだけ言つた。

名前はジョン・マクドゥエル。ありふれた名前だが、容貌もからだも大きくて目立つた。かなり白髪がまじつていたが、それでもみごとに金髪の形跡を全体としてとどめているのは、スカンジナビアのどこかの国からやつて來たという母方の祖父たちの血筋のおかげだろう。父方の祖父はスコットランドから來たのだと言つていたが、スカンジナビアへ行くと、あそこにはフィヨルドというものがある。しずまり返つた峡谷のような入江で、水の色は深い蒼に沈んで見えて、それはまるでジョンの深

く落ちくぼんだ眼の色のようだ。ジョンの先祖が毎日そんなフィヨルドを見ていたので彼のボスもあんな眼の色になつたのでないかとそんな子供じみたことを思ったのは、ジョンが予約雑誌で取っている「全国地理学協会雑誌」のなかのフィヨルドの写真をふと見かけたときのことだつたが、そのときには彼がそう自分の思いを口に出して言うとき、ジョンは「フッフッフ」と鼻でわらつたきりで、「てめえのことに精出しなよ」などと言つたりはしなかつた。

彼がジョンのところに来てからもう二年が経つていた。十七歳になつて二月経つたときからずっと町から車で半時間の距離にあるジョンの牧場ランチャに住み込んでいるのだが、そういう年の二年は年とつてからの十年にも匹敵するものだ。もう彼はいつぱしの牧場者ランチャになつていて、粗末だが丈夫な手づくりのブーツをはいて、いくぶん前かがみになつてノツシノツシと歩く。それはいつでも異変にそなえる姿勢で、たとえば、かたわらの馬が突然暴れ出したとしてもたちまちとりおさえることができなさにちがいない。ジョンももちろんそんな姿勢で働いていて、彼はジョンといつしよに働いているうちに自然に身につけたのだが、おかげで二人はそろつて歩いていけると、まるで父親と息子が並んで歩いているように見えた。ジョンも歩いていてそんな気になつたのかも知れない。いつのまにか「おれの息子よ」というぐあいに呼びかけるようになっていた。もちろん、それは彼が機嫌のよいときのことだ。

ジョンは根はやさしかつたが、仕事にはきびしい。その上、無口だつた。まるで、西部劇にいつも出て来る牧場者ランチャのようだとジョウはいつも思つていた。人使いも荒かつた。実際、彼が来るまで三み月とつづけて使用人がいたためしがない。元来は州境を越えて百マイルほど離れた町の出身である彼

がジョンのところで働くようになったのは、町を彼のポンコツ車で通りかかったときにガソリンを入れたガソリン・スタンドのアルのおかげだ。アルはこの近在の生まれで、あちこちアメリカ合州国じゅうを渡り歩いて、ニューヨークでもサンフランシスコでも働いたことがあるという「渡り者」（というぐあいには「黄金の鷲」のジャックは彼のことをいつも呼んでいた）だったが、「何か仕事ないかい」という冗談まじりの彼のことばに、彼のポンコツ車の窓ガラスを拭きながら、それが癖の人を小馬鹿にしたような咳ばらいをやつてから「あることはあるが……」と口ごもつた。それがジョンの牧場の話だつたのだが、口ごもつたあとと口に出さなかつたことばが「だけど、つづくかね」だつたことは、あとで親しくなつてからアル自身の口から聞いていた。

彼がジョンの牧場にそのまま居つくようになったというのは、気まぐれというものだ。実際、両親が死んだあと兄一家のやつかいになつていた彼は仕事を探していたし、どこかに落ちつくかうという気持になつていた矢先だつたことはたしかだが、「選りにも選つて、ジョンのところとは」と、これもまたアルがあとから笑いながら言つた。「三日もためと思つたがね。」

それがもうこれで二年になる。彼だつて畜生、出て行つてやると思つたことは正直言つて二、三度ある。こつぴどく叱られたときだが、そのたびに思いとどまつたのは、べつに意地からではない。心のどこかでこいつはこつちのほうがわるいなと思つていたからだ。そんなときはいつも仕事をいかにげんにやつてのけたときだつた。懸命にやつて失敗をしたときにはジョンは不機嫌な顔になつたが、どなりつけたりはしなかつた。それにジョンは何んと言つても一流——超一流の牧場者だつた。それは二、三日いっしょにくらしてみただけで判つた。よし、盗んでやろうと彼は思つた。ジョンの仕事

ぶりを見ていて、そいつをそっくり身につけようと考えたのだ。彼も自分を何ごとであれ一流の男になれる人間だと思っていた。そういう人間だけが何ごとにつけ一流の男が判り、彼から何かをいただけるのだ。どの世界のことであれ、一流の男には、何かしらヘンクツなところがある。一流の男がそうならこれから一流になる男にもそういうところがある。ヘンクツどうしが一つ穴の牧場に住んでいた。彼はジョンが「おれの息子よ<sup>マイ・サン</sup>」と呼びかけて来たときにも、「父親<sup>ファーザー</sup>」ということばで呼び返したことはない。まして「ダディ」というような呼び方をしたことはなかった。彼はただ「ジョン」と呼んだ。ときにはあらたまつて「ミスター・マクドゥエル」と呼んだ。それはジョンがときには理不尽に癩癩をおこしたときのことだ。ジョンが頑固でヘンクツなら、彼もそうだと自分で思っていた。そういう男でないと何ごとであれ一流にはなれない。

たいして大きな牧場であつたわけではない。牛が六十頭、馬が十頭、羊が二十頭、百エーカーのトウモロコシ畑——というのだから、たかは知れている。だいたい二人で仕事をして、ふつうはそれでできたが、収穫期になると、そこらあたりの居住地から流れて来るインディアンや南方メキシコから国境を越えて入つて来る密入国者のメキシコ人——チカーノを何人か雇い入れる。インディアンで困るのは彼らがむやみと酒をのむことであつた。酔っぱらつたあげくに派手にナイフまで抜いての私たちまわりをする。チカーノはそれにくらべるとおとなしかつたが（いつもおとなしいのは、それだけわだかまりを心のなかにかくし持っていることなのかも知れない。どうかしたあげくに爆発するこゝとがあつて、ジョンに車のジャッキをふり上げたのがいた）、ときどき移民局から人が来てつかまえて行くときがあつた。移民局の連中にちよつとつかませておけばそんなことにならないと「黄金の鷲」

のジャックがいつも言っていたが、そんなことができないのがジョンだった。チカーノたちも移民局の男に連行されて行っても、別にたいして悲しんでいるふうにも見えなかった。「また来るよ」と彼らは平然と言ひ、実際、翌年のその季節になると牧場に姿を現わした。「また来たよ。」英語の話せるのは習いおぼえた南部なまりのアメリカ合州国英語で言ひ、何度やつて来ててもろくすっぽことばをおぼえようとしないのは、肩をすくめてただニヤニヤした。

そういうインディアンやチカーノが何人来ようと、主力の働き手はジョンと彼だった。二人はそんなふうにならなうに自分で思っていた。その思いで二人は結ばれてもいた。早朝五時に起きて、あとは太陽がはるか彼方に薄紫色に霞んで見える山脈に沈むまで懸命に働く。ほとんど一日無言だった。無言で働いた。仕事は乳牛の世話から怠けたがるインディアン、チカーノを駆り立てての畑仕事、彼らの食事の世話、ケンカの仲裁に至るまで山ほどあった。ここでは車がこわれても街なかのようにすぐ電話一本で自動車屋を呼んで、修理させるわけにはいかない。すべては自分でやつてのけるのだ。ジョンはその点でもなかなか心得があった。彼がつまらぬ不注意でついに動かなくなってしまうた大型のフォード・トラックを五時間かけて修理したことがある。彼があちこちいじくりまわしたあげくにあきらめていたものだ。「おみごと。いいできた。あんたはうまいね。自動車の修理屋になれる。」彼は冗談口を叩き、それにはもちろんゲンコのお返しが来たが、予期していたゲンコだったから、馴れたボクサーのように大げさにのけぞつて倒れてみせた。

「おまえは心得があるな。」

ジョンは大きくなつて、もう自分の手に負えなくなつた息子を見るようにして彼を見た。

「ああ。」

彼は無愛想にうなずいた。

しかし、彼はジョンに自慰の現場を見られてしまったことがある。

原野のどまんなかでときどき彼は激しい欲情のたかまりを感じて、自分の手を使って放散した。いつか、むこうからゆつくり歩いて来るインディアン少女に出会ったことがあるのだ。西部劇に出て来るようなお下げの髪の毛を、顔の横手左右に垂らした少女だ。年のころは十三、四歳と見えたが、日没前の赤味がかつた明るい陽光のなかでそのお下げの髪の毛は、おどろくほどつややかに黒く光った。いちめん水気がついて濡れているように見える。さつき通り雨がそこらの粗い石ころだらけの大地をしめらせて行つたから、ほんとうにその髪は濡れていたのかも知れなかったが、もともと彼女の髪の毛は自然にそんなふうにもつややかに光っているのかも知れない。べつにインディアンの服装をしていたわけではなかった。粗末なワンピースを着て、ぶあつい毛糸の膝下までの靴下をはいて、靴はおきまりの手づくりのモカシン靴だ。父親か心やさしい兄貴かが彼女のために夜なべ仕事でこしらえたものだろう。「へい」と彼は陽気に手をあげながら呼びかけたが、少女はジロリと敵意のある眼で見返しただけだった。表情はこぼり、からだの線が身がまえるかたちになっていた。細いからだがまるで一本の鋭い刃物のようになっていて。彼がちよつとでも襲いかかる姿勢を見せようものなら、その刃物は捨身の力で彼のからだに突き刺さつて来るにちがいがなかった。彼女は一瞬のうちに彼のからだのなかにうごめいた欲望の動きをその細いからだで敏感に感じとつたにちがいない。白人は誰でもインディアン少女の女にそんなふうにして襲いかかつて来るものだと思はれ、彼女は母親から聞いてい

たのだろう。実際、インディアンの部落へ行くと、白人そっくりの顔だちをした子供が何人かいたが、あれはみんな母親がどこかで彼のような白人の男に襲いかかられたりした結果だった。

彼のからだのなかで欲望が大きな塊りになっていた。塊りになってからだを下から突き上げて来る。それはやみくもに少女に襲いかかつて、ことを仕遂げるといふものものではなかったが（少女はそんなふう思ったにちがいないが、それは彼女の誤解というものだ）、そうかと言って、彼がそれまでの人生で何度もやって来た白人の女性相手のときのように何か話しかけて、酒がそこに入って、ダンスがつづいて、そのままどこかのホテルのベッドの上に二人ではだかであるというようなものでもなかった。たぶん、彼はただ彼女といっしょに原野の石ころだらけの大地の上を寝ころびまわったことだけのことだ。そこをゴロンゴロンと二匹の交接する犬のように寝ころびまわっているうちに、自然にそれが抱擁になっている。抱擁になってからだ結び合わされている。「セックスをする」というありふれたことばで言いたくはなかった。それよりはもつと自然の掟のように自然なこと、当然なこと、彼が求めたのは、たぶん、からだだからだの結合であり合一だった。そこでことばは要らない。ことばを越えていた。

少女が黒いつややかなお下げをふらふら左右にゆらせながら、立ちどまって見送る彼の視界のなかをゆつくり立ち去って行くと（怪我をしているのか、それとも先天的に脚がわるいのか、少女は軽くピッコをひいていた。その歩き方がまた奇妙に彼の欲望を刺激した）、すでに薄闇が靄のようにあたりいちめに漂い始めたとは言えまだまだ明るい陽光のなかで彼はためらわずに立ったままで自慰をした。すぐ快感の頂点が来て、ふと眼を上げると、少女の姿が小さな影絵となって原野のむこうに消

えて行こうとするあたり、赤褐色の岩のひとつらなりが夕陽をいちめんに浴びてらてらとひとときわ  
明るく赤く輝いて見えた。

ジョンに自慰の現場を見られたのはそのときのことではない。そのときがきっかけのようになって、  
ときどき原野で彼は自慰をした。きっかけはもちろんその少女だったから、はじめのうちは少女の姿  
かたちを思い浮かべながら自慰をしていたが、そのうち、彼の心から少女の姿は消えていた。彼はた  
だ自慰をした。それがあたかも原野での自然な行為のようになっていた。

あるとき、その行為の最中でふと気がつくと、そこにジョンが立っていた。ジョンはニヤリとし  
ないで言った。

「おれの息子よ。」

それは彼の口癖だが、いつになくあらたまつた言い方になっていた。

「ジャップが真珠湾を攻撃したようだ……」

彼はげげんな顔をしてぼんやりしていたにちがいない。ジョンは自分で自分に言いきかせるように  
ゆっくりつづけた。

「真珠湾というのはな、ハワイにある軍港だ。ハワイのホノルルにある……」

彼は無愛想にさえぎつた。

「あなたはそれだけのことをおれに知らせるために、わざわざやって来たんですかね。」

「そうでもないが……」

ジョンは口ごもつた。

さつきからのジョンの表情にどこか冴えないところがあるのに彼は眼ざとく気がついていて。さすがにジョンの「マイ・サンおれの息子」だけのことはある。そう自分で思った。

ジョンはポツリとひとり言をつぶやくように言った。

「ケンがやつて来た。」

それはいい知らせではなかった。いや、今のジョンにとつてはいい知らせなのかも知れない。心のなかでそれを拒みながら実は待ち望んでもいる。そういういつにない彼の心の不たしさがジョンの落ちくぼんだ眼のあたりに出ていた。

ケン——ケネス・E・ローズ。彼はこのあたりで随一のランチャー牧場者だった。牧場者というよりはもういつ

ぱしのエンタブラナー事業家だろう。あるいは、ビジネスマン実業家。どちらにせよ、ケンは大声で話し、笑い、貪欲に事業を

拡大し、強化する。彼がジョンの牧場を欲しがっていたのは事実だった。そしてジョンの牧場の経営

がここ一、二年来思わしくなくなっているのも事実だった。世はあげて大量生産の時代だ、農業にお

いてもジョンのような個人経営の「リトル・ファーマー小さな農民」の時代は過ぎつつあるにちがいない。時代の流れに

は抗しがたい。しかし、かんじんなことはジョンが年とつて弱気になったのか、それともこのところ

持病のゼンソクがこうじて来たせいもあつてか、時代の流れをそんなふうを感じ始めたことだ。人間、

おしまいだと思つたときがおしまいなのだと、彼が牧場に来たてのころジョンが口をすっぱくして

言つたことだった。今でもそのことばを口に出すときがあつたが、それはあきらめのため息のなかで

だ。以前のように叱りとばすときに口をついて出るという感じのものではない。

ほんとうにジョンはここ数カ月でめつきり年をとつていた。ここらが潮どきだとして、フロリダあ

たりの気候のよいところに引退をきめ込む考えに彼が取り憑かれたとしても、ふしぎはない。活動的な男であればあるほど、いったんくたびれ始めたとなると、すべてを投げ出したくなるものだ。残念だったし、ブルータス、おまえもかという感じもあつたが、ジョウは自分も動きの激しい男であるだけにジョンの気持の動揺もかえつてよく判る気がしないでもなかつた。ジョン同様、彼も根はやさしい心の持ち主なのだ。

ときどき、ジョンの未来のくらしを思い描いてみるものがあつた。することと云えば、まずちよつとした大工仕事か庭の手入れぐらいのことだが、何ごとにも几帳面で仕事熱心な彼のことだから、そういう仕事も馬鹿にしないで熱心にやつてのけるにちがいない。たいして大きくもない庭の芝刈りを、大型トラクターならぬ小さな芝刈り機で丹念にする。あとは気がむけば、テーブルをつくつたり食器棚を手製のものでそろえたり、あるいは、ここでもときどきやつているように猟銃をもつてキジうちに出かける。ときには老眼鏡をかけて例の黄色の表紙の「全国地理学協会雑誌」に読みふける。いや、そのつもりでいるのが五分も経たぬあいだに居眠りを始めているにちがいない。とにかく五十年近く、働きに働いて来たのだ。くたびれも眠りもからだのなかにいくらかも堆積しているのだろう。「全国地理学協会雑誌」はいい催眠薬になつていた。今でもよくジョンは雑誌を膝にひろげたまま眠り込んでしまつていた。どういふわけからか、そのたいして面白くもない黄色の表紙の雑誌は、牧場者ランチャーの家にいくと、居間のマガジン・ラックにたいして入つていた。もつともどこへ行つてもたいして読んでいけるけいはなかつた。みんな引退してからでも読むつもりになつていられるのかも知れなかつたが、引退して黄色の表紙の雑誌とともにフロリダあたりの暖かい海のそばに住むというのが、ここらあたりの

牧場者の夢であるように見えた。

おれはそんな間の抜けたくらしをやるつもりはないと心の一方でいきまきながら、もう一方で、雑誌を膝にひろげたまま老眼鏡をかけて居眠りをするジョンの姿に、ジョウはふと自分の未来の姿を重ね合わせていることがあつた。もちろん、何十年も先のことだ、たいして現実感があつたわけではない。その未来に達するまで、まず妻となるべき女を見つけて結婚して家庭をつくつて、そのうち子供がもちろんできて、それが大きくなつて、今の彼ぐらいの年になつて、それからさて、ということになる。引退はそれらすべてを生きたあとのことだ。ほんとうに彼にはこれからそれらすべてを生きるということだけがあつて、まだ何ひとつ確固としたものは行く手になかつた。彼にはすべてが開かれている。原野のように。

「それで売ることにしたんですか。」

彼はジョンに単刀直入に言つた。ジョン同様、彼もまわりくどい言い方をするのは苦手だつた。それにそんなインテリくさいやり方は彼の性にあわない。おかげで思わぬやつかいごとをひき起こしたこともあつたが、人間の性格というものはそうやすやすと変らぬものだ。まつとうなことをまつとうに言つて何がわるいという気持もある。

「イエス」とジョンもまつすぐに言い返した。そんなときジョンは言いよんどんだりしない。「売ることにした。」ただそうキツパリと言つてから、「おまえのことは引き取つてもよいと言つていた。あいつもおまえの能力を買つていと言つていた」と、コーン・パイプをくわえなおすようにつづけたときには、どこか彼の氣を惹くような言い方になつていた。ことばそのものより口調がそんなふうになつ

ている。

「おれは残る気はないな。」

彼はピシヤリと叩き返すように言った。

「おれはあいつと性が合わん。」

ケンはおれが面白い男ではなかった。ジョウにはやり手がきらいだという狭い根性はなかったから、ケンの事業の拡大のやり方に少々あくどいことはあつてもそんなことは気にかけていなかった。からだつきと同じように太つ腹で、事業家、実業家にしてはケチでもない。ただ、人間には虫が好かぬということがある。むこうもそう思っているのかも知れない。バーで一度からまれたことがあつた。彼の髪の毛が黒いのは、彼の血にはインディアンの血が入っているからではないかというのである。それだけでも言いがかりもはなはだしいが、インディアンはもとアジヤから来たということだ。つまり、あの黄色い顔をした出っ歯で、やぶにらみのジャップとおまえは親類じゃないかとケンはつづけてそこまで言った。「黄金の鷲」でのもんでいたときのことだ。ケンは力自慢の大男だが、ジョウも痩せてはいたが筋肉は十分について上背うわぜいもある。それに若さということになれば、腹の出かかった中年男のケンはとうてい彼の敵ではないだろう。ただそこでひと波乱まき起せば、町の有力者のケンのことだ、彼自身は笑つてすませておくれと彼のとりまきがゆるさないうちがいない。あとあと面倒になるにきまつていて、ケンもそこを見こして酔つたまぎれに居丈高に彼にのしかかるようなものの方をして来たのだろう。しかし、売られたケンカは買わなければならぬ。彼はとつさに身がまえていたが、とたんにジョンがまるで神様と示しあわせでもしたように頑丈な木の扉を排して立ちあら

われて、「おれの息子よ」と大声を出した。「おまえ、やけに今夜はうれしそうな顔をしているじゃないか。いい子でも見つけたのか。」ジョンは二人のあいだに割つて入るようになくおどけた口をぎいた。「おまえもそうじゃないか。」ジョンはケンにむきなおつていた。

「おれはケンのところで働く気はないな。」

彼は原野のどまんなかでジョンと顔をつきあわせるようにして立ちながら、くり返して言った。正直言つて、自分で自分に言つてきかせているようなところも少しはある。ジョンは黙つてうなずいてしばらく彼の顔をじつと見てから、彼の心のうちを読みとつたようなことを言つた。

「どうやらおまえはここを出て行く気だな。どこへ行くのかね。兄貴のところへ……」

ジョンはちよつといたずらっぽくジョウを見た。

「もちろん、おまえのことだ、帰るつもりはないだろうな。」

「ないな。」

ジョウはぶつきらぼうにジョンのことば尻をつかまえて言つた。

「おれは、西ウエストのほうへ行つてみるよ。」

「どうしてかね。」

「あそこには何かがありそうな気がするからな。」

「あんまり行きすぎて……」

ジョンはまたいたずらっぽくジョウを見た。

「ジャップの国まで行つてしまうなよ。」

「そこまで攻めて行くことになるかも知れんな。……どうせ、おれみたいにからだが丈夫なのほどの道兵隊にとられるんじゃないかね。」

「おれの息子よ、<sup>マイ・サン</sup>気の毒だが、おれもそう思うよ。」

ジョンはうなずいた。そのあと、(自由を護るためだ、しっかりとジャップを殺して来い)、というようなことを彼は言わなかった。将来は州議会か、それとも町の保安官<sup>シエリフ</sup>の選挙にでもうって出ようとしているケンならそれぐらいのことは言いかねないだろうが、なにしろジョンは寡黙で通っている男だ、そんな芸当は棄にたくてもできなかった。

「ケンがこのあいだ訊いていた。」

ジョンはまたポツリと言った。

「おまえのとこの若い者は……というのはおまえのことだが、あれは何でここで走ってばかりいるのかねとな。ここらのインディアンでオリンピックにマラソンで出たやつがいる。そいつの真似をしているのかも知らんが、世界は今や戦争でオリンピックどころじゃない。そう言っていたな。ケンのことは聞いてみると、おれもおまえに訊きたくなかった。おまえはいつたい何んでまたマラソンの練習なんかしているんだ。」

「マラソンの練習なんかやっているつもりはないな。」

彼はソツポをむいて原野のひろがりを見た。

「おれはただ馳けているだけだよ。」

「……………」

「コヨーテが馳けて行くみたいなんだ。」

実際、原野のどまんなかを馳けているときにコヨーテが一匹彼よりはるかに早い速度で彼の横手を馳け抜けて行ったことがあった。あれは何かに追われていたというのではなかった。獲物を息せききつて追っているというのでもなかった。コヨーテはただ馳けていた。まるでこちらの世界からあちらの世界へ馳け抜けて行ったようなものだ。夕暮の光線を毛皮の光沢の美しいからだいっぱいに受けてほとんど銀色の輝きそのものとなつたけものは懸命に馳け抜けて行った。

「おれの息子よ……」

ジョンはまた唐突に言った。

「戦争に駆り出されても、おまえは生き残れよ。国というものはな、おまえが生きても死んでもあるものだ。おまえのほうも国があるうがなかるうが生きている。じゃあ、おまえは生きていたほうが得だ。だから、なんとしてでも生き残る。おれの戦友にそう言っていたやつがいたな。」

ジョンがこのまえのいくさのときの生き残りだという話は誰からか聞いていた。自分では言わなかったが、どこかの激戦で生き残つたのは彼の中隊で彼を入れて五人だった。

「おれの息子よ……」

彼はまた同じ呼び名でジョウを呼んだ。

「おまえはそう思わないかね。」

「おれもそう思うよ。」

ジョウはまたソツポをむいて原野のひろがりに眼をむけた。

「おれは生き残るよ。」

「グッド。」

ジョウは何気なく訊ねた。

「その戦友は……なんとしてでも生き残ると言ったあんたの戦友はどうしたんですかね。生き残ったんですかね。」

「あいつか……あいつは死んだ。一発で頭を吹き飛ばされていた。」

ジョンは即座に言った。

「帰りますかね。」

ちよつときこちない沈黙のあとでジョウは言い、ジョンがうなずき、二人は歩き出していたが、ジョウがふと足をとめたのは、今しも一頭のコヨーテがこちらの世界からあちらの世界へむかって前方の原野を激しい勢いで駆け抜けて行くのが見えたように思えたからだ。銀色の輝きが彼の眼にゆつくり残った。

ジョウは知らなかったが、ジョウをひそかに想っていた女がいて、それはペギイだった。ペギイはまだ小学生だったから（やつと四年生だ）、女というのもおかしいし、おこがましいが、おませなペギイは自分ではもういっばしの一人前の女のつもりになっていた。彼女の夢のなかではジョウと同

じ年ごろか、あるいは、ときには彼より年上の彼女が彼をひそかに恋している。夜、ベッドの上でそんなふうな夢物語をくりひろげてみるがあった。たいして長つづきする夢物語であつたわけではない。たいていが町の小さな教会での結婚式でめでたく終つたところで、彼女はいつも安心したふうに眠くなり、実際それからおだやかな寝息をたてて眠り始めた。そのまま朝までぐつすり眠つて、夢はたいてい見ない。眠るまえの夢物語の展開のなかで十分に見ているからだろう。寝起きのいい子で、朝は六時前にすつかり眠りからさめていた。

ジョウとはじめて会つたのも、その教会の日曜礼拝のときだつた。背の高い、かなり痩せつぽつちの青年が隣の席に来たかと思つたら、それがジョウだつた。そのときは彼のボスのジョンもいつしよに来ていて、ペギイの父親とジョンとは顔見知りのあいだがらだつたから、ジョウもジョンが父親に紹介したのだ。ペギイにもジョンは声をかけてジョウを彼女に引き合わせた。おませなペギイのことで、年上のレデイがやるように——いや、そんなさまは気さくな女たちが多いこの町のことだ、ペギイは教会のつい近くの町のただひとつの映画館にかかる映画のなかでしか見たことはなかつたが、とにかくレデイになつたつもりで手をさし出していた。彼女がジョウを気に入つたのは、馬鹿にして笑ひ出すかと思つたら青年が器用に腰をかがめて彼女の手をとつて、そこに軽く接吻までしてくれたからだ。そのときの青年のこそばゆい唇の感触をペギイはまだ掌の外側に感じることができた。

それから日曜ごとにペギイはジョウに教会で会つた。彼女はもう手をさし出さなかつたし、ジョウも腰をかがめたりしなかつたが、顔を見かけるとジョウは片眼をつぶつて眼くばせしたり（それはいかにもあんたの存在をわたしは知っているぞというぐあい）の眼くばせだつた）、ときには、「元気かね、

わたしのちつちやな信心深いレディ・フレンドよ」というふうに声をかけて来たりした。ペギイは実際、信心深い女の子で、日曜ごとの教会行きは決して欠かしたことはなかったし、自分でも、自分はいつも神様のことを考えて生きているのだと思っていた。ペギイがジョウの顔を教会で見かけるたびに何かしらホツとしたのは、自分の好きな人が不信心者であつては困るという気持の動きがあつてのことだ。

「あいつは教会に足を踏み入れたことがない。あいつは無神論者で、アカだよ」と父親がいつも悪口を言っているガソリン・スタンドのアルのようになつたらと、ペギイはいつもおそれていた。彼女はアルがジョウの友人であることを知っていた。わずか人口千五百人の町だ、おたがいがおたがいのくらしの襞のこまかなところまで知っていたとしてもふしぎはない。

ジョウがいつも町の西方に山ひとつへだてて大きくひろがる原野に出かけて、馳けているという話もペギイは聞き知っていた。ジョウの「馳ける男」という呼び名もかなり町では通りのいいものになつていて、教会で最初にジョウがジョウを彼女の父親に引き合わせたときにも、「これがかの有名な『馳ける男』だ」というような言い方をした。

ペギイはジョウの「馳ける男」という呼び名を聞いたときから、ジョウはチャックのようにオリンピックにでも出るつもりで走る稽古をしているのだと思ひ込んでいた。チャックはインディアンだが、彼らの部族の「英雄」で、オリンピック競技にマラソン走者として出場して、二度目のときには銅メダルまで貰っていた。もう三十年も昔の話になるが、そのころならチャックは白人の世界でも何者かであつたにちがいない。なにしろ、この人口千五百人の田舎町からはるばるヨーロッパくんだりまで

出かけたことがあるのは、このまえの大戦に参加してフランス戦線で右脚を膝の下から地雷で吹き飛ばされて帰って来た、その負傷のせいか町随一の気むずかし屋で通っている薬局の主人のミスター・グリッグスぐらいのもので、それだけでもオリンピック競技のおかげで二度もヨーロッパに出かけたことのあるチャックは別格の感じがあつたが、チャックはただのヨーロッパ見物に出かけたのでもなければ、いくさにいよいよや駆り出されて大西洋を渡って行つたのでもない。オリンピック競技にアメリカ合州国代表として出て、銅メダルまで合州国の名誉のためにひつさらつて来てくれたのだ。ニューヨークやワシントンから新聞記者が彼の出身地の部族の「リザーベインヨン居住地」はおろか、そこからかなり離れたところに位置するこの町までやつて来てあれこれ取材して行つたのを、町の老人のなかで何人かはおぼえていた。チャックは子供のときこの町に働きに来て、そこでかつて学校で陸上競技をやつたことのある主人に走り方の手ほどきを受けた。それが「英雄」発生のそもそものはじまりであつたと、すくなくともそのころはまだ生きていた主人の談話をのせた新聞は主張していたが、しかし、もうすべては遠い昔のことだ。何年かまえからチャックは彼の一族らしい何家族かを引き連れて「居住地」から移つて来てジョウの牧場の近くの原野に掘建て小屋をたてて住んでいたが、ときどき町にやつて来て、銀行とミスター・グリッグスの薬局と小さなスーパー・マーケット、それにジャックの「黄金の鷲」がたち並ぶ町の目抜き通りをゆるゆると歩いて行つたが、そのチャックの姿は、どうひいき目に見ても牧場の季節労働とときどきの手間仕事で食いつないでいるインディアンの老人の姿で、昔日の「英雄」のおもかげはまるつきりなかつた。

そんなチャックの昔の「英雄」のいさおしをペギイが知つたのはローラがいたからだ。ローラはペ

ギイより三つ年上の少女だったが、彼女も原野の片隅の掘建て小屋に住むインディアンで、ペギイの家に住み込みの女中に来ていた。つややかに光る長い黒髪を持ち主で、彼女はそれをお下げに左右に垂れ下げていて、歩くとぶらんぶらんとお下げはゆれ動く。歩くとき、先天的に脚に故障があるのか、軽くビッコをひいた。無口で、よく働いたが、ペギイはいつも油断のならないものを彼女に感じとっていた。痩せていて、背もかなり高かったから、同じように痩せて背丈の高いペギイと並ぶと、まるで二本の棒が立っているみたいだとこれはペギイの父親のウイリーが冗談口を叩いてペギイを怒らせた。「二本の棒」という表現が彼女を怒らせたというよりは、ローラというインディアンと自分がいっしょにそのことばのなかにまとめ上げられてしまったのがひどく口惜しかったのだ。

そのローラが町の中心の通りをゆるゆる歩いて行く老人を指して、「あれがチャックですよ」と教えてくれたのだ。ローラの口調はあきらかに誇り高いものになっていたが、ペギイはキョトンとして眼のまえを病み上りの男のようなたよりなげな足どりで、おまけにローラ同様、軽くビッコをひきながら歩き去って行く汚ないジャンパー姿の大男の老人を見ただけだった。体格のよい男だったが、大男というものは老人になると筋肉の抜けがらめいた感じになってしまうものだ。チャックもそうで、ペギイが眼にしたのはそういう大男の亡霊だった。「あの、わたしたちの英雄です。」ローラはペギイの気持にかまわずそうやぶから棒に言ってから、大男の亡霊の故事来歴を早口にしゃべり始めた。まるで「英雄」の生き霊に取り憑かれたようにいつもの無口なローラに似合わぬ早口の雄弁なので、ペギイは呆気にとられたようにローラを見ていた。チャックの故事来歴よりもペギイをおどろかせたのはむしろそちらのほうだった。オリンピック競技は、それがそこで催されてチャックがめでたく銅

メダルを貰ったというヨーロッパのどこかの都会同様、アメリカ合州国南部の田舎町からはあまりに遠くかけ離れていてどうにも現実感がなかった。そんなたよりなげに歩く老人がかつてのマラソン競技の勝利者であると聞いて、ペギイが「信じられない」と言うと、ローラは「しかし、それは本当です」とちよつと悲しげな眼でペギイを見てから、そう世界の真理を告げるような決断のこもった口調で言った。

マラソン競技の自然の連想のようにしてペギイはジョウの名前を口に出していた。恋人の名前というものはじつと胸に秘めておきたいものだし、同時に誰かさしつかえない人には言い出したくなるものだ。ジョウの名前を口に出したとたんペギイは胸のつかえが一気におりたような気持になり、同時に顔が自然に真赤になつて来ているのが自分にも判つたが、何くわぬ顔で（と自分で思つていた）ジョウも「馳ける男」であると言つた。ローラは彼のその呼び名は知らなかつたが、ジョウが彼女の部落の近くの牧場の男で、ときどき原野で馳けているのは知つていた。一度、原野で馳けているのに出会つたことがあるとも言つた。「すばらしかつたでしょう」とペギイはとつきにことばを返したが、ローラは笑いにまぎらした。ペギイはジョウが馳けている姿をまだ見たことはなかつたが、それがすばらしいものであるとは見当がついた。いや、それはどうあつてもすばらしいものでなくてはならない。答を笑いにまぎらせてから、それ以上ジョウについての言及を避けるようにしてローラはチャックの昔の激しい練習ぶりのことをしゃべつた。彼が生まれた「居住地」のあたり、そこに大地の皺をすべて畳み込むようにして突然どこまでも平らに伸びきつていた原野が激しい起伏を始めて、大きく切れ込んだ谷間とそこから急角度に天にむかつてそびえ立つ岩山がづらなる。そこらあたり、部落はす

べて岩山の頂上にまるでトリデのようにしてあるというのだが、まだヨチヨチ歩きのところからチャックは起伏を駆けまわつて育つた。それがそもそものはじまりであつて、人がよく言うようにチャックはこの町に働ぎに来てから走ることを主人に教わつたりしたのではないと、ローラはにらみつけるようにペギイの顔を見ながら言つた。もちろん、この町に来てからも彼は走りに走つた、風の日、雨の日、雪の日、赤ん坊の頭ほどもある藪が天から叩きつけて来る日、かまわず彼は走つた。ときには今ジョウが馳けているという原野にまで出かけて走つたが、そんなときでも彼はジョウのように車でそこまで行つたのではない。町から馳けて行つて、その往復の道のりがすでに彼の練習になつていた。……

「でも、今は……今はもうそんなことしていかないのじゃないの。」勝ち誇つたようにしやべりつづけるローラをペギイは意地わるくさえぎつた。「あの人、第一、ビッコじゃないの。」

その彼女のことばは、もちろん、二つの意味をもつていた。まず、チャックは今ほ老いぼれてビッコをひいていること。そのチャックのことを自慢げに語つてジョウを馬鹿にするローラもビッコであること。それに、とにかくジョウは若くて元気で、ビッコをひいていなくて、毎日のように原野を駆けまわつてゐるのだ。ローラは彼女の反撃にいつたん悲しげに眼を伏せたが、すぐ、キラキラと黒い眼を輝かせながら弟のロンのことを言い出していた。ロンはペギイよりも二つ年下だつたが、めつぱう足が速くて、これならチャックのあと継ぎになると部族のあいだで評判になつてゐるというのだ。「居住地」のお祭りにローラの一家がそこまで帰つたときに、そのお祭りというのが足自慢の若者たちが原野から岩山の頂上の部落の祭壇まで駆け上つて来るといふお祭りだが、ロンはそのお祭りに加わつてけつこういいところまで行つたというのだ。原野の片隅の掘建て小屋に帰つて来てローラたち

がチャックにロンのいさおしを告げると、いつも笑ったことのないチャックが眼を細めて笑いながら、「ロン、おまえはオリンピック競技で金メダルが確実だ」と、ローラの弟の小さなからだをかかえるようにして、頬ずりしてローラたちをおどろかせた。それからというもの、昔チャックがしていたように風の日、雨の日、雪の日、赤ん坊の頭ほどもある電が天から叩きつけて来る日、彼はかまわず原野を走り、ときには町まで馳けて来ることもあるというのだが、それはまったくペギイには信じがたい話だった。実際、ロンは人一倍小柄な男の子で、一度姉を訪ねてやつて来たのを見たことがあるペギイの記憶では、汚れて裾の断ち切れた半ズボンから突き出ていた二本の脚も決してたくましいものではない。ローラは嘘をついているのだとペギイは思い、そう思うと、何か安心した気持になった。

ペギイの母親の口癖は「インディアンは嘘つき」でペギイもいつも聞かされているうちにそんな気になっていたから、ローラが嘘をついているとしても当然のことだが、ペギイの母親の口癖はもうひとつあって、「ああいう連中は何を考えているのかさっぱり判らない」だった。「ああいう連中」にはローラたちインディアンほかにクロンボもチャイナマンもいたが、彼女の場合、とりわけジャップが「ああいう連中」だった。ペギイの両親はもともとはこの町の出身だが、つい一年まえに町に帰って来るまではペギイの父親の仕事の都合でずっとカリフォルニアの南のほうの小さな都会に住んでいた(ペギイの父親はそこで工場の検査技手をしていた。眼をいたためて商売替えしなければならなくなつて、生まれ故郷に帰つて来て保険会社の代理店を開いた。「よそ者」ではないが、それでもときどき、「黄金の鷲」のジャックが持論のカリフォルニアあたりが地震で太平洋に落ち込んでも気にしない論をぶつて彼をいやがらせた)、その小さな都会は言ってみれば、「ジャップの町」だった。通りである

うと店屋であろうと、幼稚園に行こうが学校に行こうがジャップはどこにもいて、ペギイたち白人のほうがるまるで遠慮してくらしているみたいだった。その町でのペギイの家の隣人も小さなドラッグ・ストアを開いているジャップの一家だった。

「ああいう連中」のことから話がジャップのことになると、必ず出て来るのは、父親のウイリーの「昔はな、アラスカはシベリアとくつついていたんだよ。それで、インディアンはアジアから歩いてやって来たんだ」という話だった。そこからジャップとインディアンは「親類」だというような話になるのだが、その父親の話がどうにも現実感に乏しかったのは、ひとつにはペギイにはアラスカは判ったが、シベリアという地名がどこの地名なのか見当がつかねたからだが、もうひとつ、あの西部の「ジャップの町」に住んでいたカリフォルニアのジャップたちが誰も背丈が低い上に猫背で、トリのトサカのようなものを幾本もさしたかぶり物をかぶって原野をのっしと歩いて行くインディアンや偉丈夫たち（実際にはペギイはそんな偉丈夫の姿かたちを見たことはなかったし、町で見かけるインディアンはもつと見すばらしかったが、ペギイの心のなかの図柄ではいつでもそんな偉丈夫の姿かたちでインディアンは立ちあらわれた）とは似ても似つかなかったからだ。たとえば、あの南カリフォルニアの都会で隣人だったミスター・ナカタのことでペギイが思い出すことと言えば、彼女がキャンディを買いに行ったときに歯をむき出しにして精いっぱい愛想笑いをする、それから何度も腰をかがめてサンキューサンキューと言うときのからだ全体の動きだけだった。

ミスター・ナカタの一家とペギイの一家はべつに親しいつきあいをしていたわけではなかったが、それでも隣人どうしのよしみということもあつてときどき会うと口をききあう仲になっていた。それ

だけのつきあいからペギイの母親がジャップは嘘つきだという結論を出したとすればまったくジャップにとつては公正ではなかったにちがいないが、ジャップは何を考えているのか判らないという彼女の確信はミスター・ナカタに関するかぎりあつていた。彼も彼の妻のミセス・ナカタ（クニエという名前の持ち主であることもペギイはいつのまにか知つていた。ミスター・ナカタがいつも彼女をそんなふうに呼んでいたので）も英語がよくできないせいもあつてか、陰気に押黙つているかニコニコしているかそのどちらかで、どちらからも何を考へているのかさっぱり読みとれなかつた。救いは三人いた息子のうちのいつとう下のトミイで、このペギイより二歳年下、ちょうどインディアンのおおない年の少年はいつも生粋のアメリカ合州国人のように明るい顔でいて、質問にもテキパキと答へた。彼はあたりの人間誰にも好感をあたへたらしく、ミスター・ナカタのこともミセス・ナカタのことも彼の二人の兄たちのこともきれいさっぱりと忘れ去つてしまつたように話をするペギイの母親も、近所づきあいにもともとまつたく関心をもたなかつたペギイの父親もトミイのことはおぼえていて、ペギイが彼のことを何かの拍子に思い出して口に出すと、「ああ、あいつ、あのジャップの子供」というぐあいにならずき、それもかなり肯定的なうなずき方だつた。

「トミイは日本に帰つたらしいな。」

ある日、ペギイの父親はペギイが彼の名を口に出したところであつたり忘れていたことを不意に思い出したように言つた。

「どうして」というのがペギイのときの反応だつたが、父親はペギイのその反応にかへつておどろいたように見えた。「どうしてつて、あいつ、ジャップじゃないか。ジャップはジャップの国に帰る

のが本筋だ。」父親はペギイをきとすように言った。「ミスター・ナカタも帰ったの。」「いや、トミイだけらしいな。昔からこの子は日本の学校に入りたいとあの男は言っていた。」「どうして」とはペギイはもう言わなかった。言ったところで、「どうして、あいつ、ジャップじゃないか。ジャップはジャップの学校に入るのが本筋だ」と言われるにきまつている。代りにペギイは「トミイは日本のどこに帰ったの」と訊ねた。「トウキョウ?」と日本の都会でただひとつ知っている名前をたたみかけるようにしてつづける。父親はかぶりをふった。

「何んと言ったか知らんが、Hの頭文字で始まる都会だ。アメリカ合州国に來ているジャップはたいはいそこから來ているらしいな。そこに帰った。」

「それでそこにトミイは帰ったのね。」

ペギイは念を押すように言った。父親はうなずき、「さあ、もう家に入ろう」と言った。

家のすぐわきの空地の陽だまりがあまり気持ちよさそうだったので父娘二人はそこに出て話し合っていたのだ。日本とアメリカ合州国のあいだのいくさはもう始まっていたが、いくさの話は二人の話のなかに出て来なかった。ヨーロッパでのオリンピック競技が南部の田舎町からかけ離れていたように、いくさもそこからはあまりにも遠い事件だった。ペギイはしきりにトミイが帰ってそこで学校に通っているという町の姿かたちを心に描こうとしたが、心のなかの映写幕はいつまでもまっ白なままだった。

ジョンがジョウの運転する旧型のばかでかいフォードのトラックでケン家に着いたときには、ケンは作男二人といっしょに屋根の上に乗って雪下しをやっていた。働き者のご多分にもれずケンも自分のからだを動かさないと気がすまないのだろう、ひとりは白人の中年男、もうひとりはチカーノの若者というとりあわせの作男二人に仕事をまかせつ放しにしないで屋根の上に厚く積もった雪に大きなシヨベルをしきりに突き立てている。家からかなり離れた車庫のまえに車を置いてジョンとジョウが歩いて近づいて行くと、ケンはシヨベルをふり上げるようにして合図をした。白い雪が明るい午後の陽光のなかに輝き、すでに半ばその白いぶあつい堆積を落とした真赤な屋根とあざやかな対照をかたちづくっている。ジョンがケンのその歓迎の挨拶に応えるまえにジョウが「おれたちはジャックだ、この家を占領しに来たぞ」と大声で叫んで彼をおどろかせたが、屋根の上のケンはかえっておちつき払っていた。

「白いジャックなどは見たことがないぞ。」

それからケンはすぐ屋根から下りて来て二人を中庭の小さなプールに面したポーチから家のなかに招き入れようとしたが（冬のあいだなのでその貯水槽まがいのプールには水は入れられていなかった）、夏のあいだは水はいつも入っていて、ケンは二人の子供といっしょに毎日のように泳いでいた）、ジョウは入ろうとしない。「白いジャックがあんたの代りに雪下しをやつてあげるよ。あんたに爆弾一発見舞われておダブツにされないためにな」と言つてケンの手からシヨベルを奪い取るようにして取ると、屋根にかけたハシゴをすばやく上つた。ケンは呆氣にとられたようにその後姿を見送つたが、

すぐジョンにむきなおつて「カム・イン」と言った。ジョンは「サンキュー」とうなずいて彼のあとにつづく。

ケン——ケネス・E・ローズはへんな顔をしていたが、ジョンはジョウの心づかいのようなものを感じとつていた。これからジョンは牧場の売買契約に署名するのだ。降伏文書に署名するようなものだ。ジョンは自分の心のどこかで思っていて、それはジョウの心の動きでもあつてそんなところを見たくなかつたのにちがいない。さつきからのケンへのつかかりにもその心の動きがたしかに反映している。あれはきついところもあるが、なかなか心やさしいところもある青年だとジョンはかねがね思つていたが、その気持ちを強くしたのは今度のこの牧場の売却の話が始まつてからのことだ。ジョウが売却に反対で、ケンがどのような甘い条件を出しても彼がケンの所有になつた牧場に残るつもりはないことは判つていた。彼もジョン同様いつたんこうと決めたら心を変えようとしなない青年なのだ。慰留のことはジョンは口にしようとしなかつた。それに彼の決意はジョンの気に入つていないこともなかつた。ジョンあつての牧場で、ケンのものとなつてしまつた牧場は、もはや、ジョウの働く場所ではない——ジョウはひと言、そうはつきり言つたことがあつて、ジョウのそのことはどんなきれいなことばよりもこころよいものに彼の耳にひびき、心のうちにいつもよみがえつて来る声として残つた。

何ごともまつこうにことをやつてのける牧場者どうしだ。何んのかんという繁文ジヨク札はなかつた。マキが威勢よく燃え上つている大きな暖炉のそばですぐ契約の署名が終ると、ジョンはかえつてサバサバとふつきれた気持になつた。(これでよし) という感じだ。

それからケンの夫人がお茶をもつて来て（赤毛のでつぷり肥った中年女だった。ジョンの昔の女房も赤毛の女だったので、彼女を見るとかすかに心が動揺した。いや、それも昔のことで、もう今はジョンの心は、彼女がイギリス婦人のようにもつたいぶって白い陶器のポットからあたたかい湯気の立つ紅茶を茶碗に入れるのを眺めながらきわめて静かだった）、しばらく三人で話して、彼女が何か用事ありげに立ち去つてからも、しばらくジョンはケンとだだっ広い部屋のなかに残っていた。ケンがしきりに今度の土曜日に行なわれる家畜市のことを話して、夫人につづいて立ち上るしおどきを失つてしまつたのだが、このまま立ち去つてしまえばそれでもうその瞬間にでも彼の牧場がきれいさっぱりとケンの持ちものになつてしまふような気持がふとしたのも事実だった。契約では来年五月に完全に引きわたすことになつていた。それまで半年以上あるが、そのあいだにケンから金を毎月もらつて負債を払い、将来の生活設計をたてる。「おれはあんたをすぐ追い立てるようなことはしたくないからな。」ケンは恩きせがましく言つたが、冬のあいだ牧場を手に入れたところで仕方がないのだ。それよりはジョンとジョウに管理させておいたほうが、べつの管理人を雇うより安上りだし便利だと踏んでいるのにちがいない。「そうだな、いい季節に出て行つたほうがよいからな。」ジョンもそんな相槌を打つた。

外からジョウが白人とチカーノの作男に話しかける声が陽気にきこえて来る。陽がななめにポーチの窓からいつぱいに入つて来て、そのあたたかい光の散乱のなかにいると、汗ばんで来るほどだ。その上暖炉の火はまだ背後で音をたてて燃えていたが、二人は上衣もその下に着ていたスエーターも脱いでワイシャツ一枚になつて話した。家畜市は土曜日の正午に始まるのだが、それはこのあたりの馬

の市としては最大のものになるだろう。卓子の上においてあつた家畜市のビラを手わたしながら、彼はまるで自分がその市の主催者であるような自慢げな顔になつた。「あんたにはもう関係がないだろうが……」彼は話の途中で何度となくそう言つた。「あんたはもう引退してフロリダに住むんだからな。」そういうふうになうときもあつた。「ああ」とジョンは横柄にうなずいた。それはまるでひとかどの成功者のようになうなずき方で、ジョンは自分とケンの立場がそのうなずきひとつできれいに入れ代つたような氣持になつた。

またひととき大きくジョウの話し声が聞こえて来る。つい昨日、原野を馳けているときに大きなガラガラ蛇に出会つたというような話だ。いや、それは彼をめぐけて立ちむかつて来た。大きなガラガラ蛇で体長が六フィートはある。「いいことがあるよ」とチカーノの若者が下手な英語で言う。「ほんとうかね。まるつきりわるい知らせじゃないかね。」ジョウが陽気な声で笑つた。「メキシコ人によくても、アメリカ人にはわるいつてこともある。ガラガラ蛇には英語は判らない。」しかし、あの人、スペイン語だつて判らない。「あの蛇」と言うべきところをチカーノは「あの人」と言つた。「アツハツハツ」とジョウがまた大声で笑つた。「『あの人』とはよかつたね。」白人の中年男の音がする。「『あの人』は男か女か。」これはまたジョウの声だ。「いや、あれはおれのところにやつて来ようとしたのだから女だ。美人の女にきまつている。」

「彼は……」としばらく自分の話をとぎらせて屋根の上の話し声に耳を澄ませていたケンが言い出した。「あの人」がガラガラ蛇なら、もちろん、「彼」はジョウのことだ。それにきまつている。ケンはつづけた。「おれのところに来る氣はないんだな。」

つづきは製品版でお読みください。